慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『同胞』の思想
Sub Title	The thought of "Do-hō"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori) 酒井, 正文(Sakai, Masafumi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.11 (1979. 11) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19791115-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『同胞』の思想

中村勝範
酒井正文

一　問題の所在

新人会機関誌『同胞』は、『先駆』の後継誌として、大正九年十月に創刊され、同十年五月まで計八号発行され、その後『ナロオド』と改題された。[1]『先駆』からの改題理由には、一、財政上の負担軽減、二、宣伝本位の編集方針への転換、の二点が挙げられている。[2]『デモクラシイ』、『先駆』とは異なり、体裁上小冊子となつた『同胞』は、内容の表現形態からして宣伝調子のもの、会員の活動報告の類などを掲載したが、結成二年を迎えた新人会の活動内容を生き生きと伝えている。本稿は、『同胞』を通して、こうした活動の源となる新人会の思想を検討するものである。

第一次世界大戦後の世界秩序は、パリ平和会議によつて整理され、固定化された。大戦を契機にわが国に流入した多種多様な思想も、爾来二年余、それぞれの系統に纏まる方向にあつた。大正九年に入ると、論壇の傾向としては、時代の流行ともなつた社会改造の雑多な主張が、ブルジョワジー対プロレタリアートの対立という階級闘争の観念に纏まる傾向を見せて

きた。[3] 階級闘争とは何のために戦い、何のために勝たねばならぬかを考えることなしに、プロレタリアートはただブルジョワジーと戦つて勝ちさえすればいい、という考えの登場である。吉野作造は、改造論が唯物思想と結び、人間はすべて物質的環境の如何によつて支配されている、これさえ改めればいいという制度万能論となつた、[4] という。

第一次世界大戦頃よりわが国思想界に影響をあたえた新カント派の哲学は、個人格の向上を説き、社会改造運動に、個人格の向上及び解放を通じて社会の改造を成し遂げるべきである、との方向性を示した。この点、大正九年に入つての改造論の傾向は、異なつた展開をみせた。アナーキズム、サンジカリズム、ギルド社会主義、ボルシェヴィズムなど哲学的基盤を異にするが、階級的対立観念の鮮明な改造論が、個人格の解放に関心を向けるよりも社会組織の変革をめざして抬頭した。これに対して、新カント派流の思想に影響を受けた立場は、このような改造論を「物的改造論」と批判し、あくまで個人格の向上を通じて社会の「心的改造論」を目標とすべきだと主張したのであつた。[5]「物的改造論」の抬頭には、国際的にも国内的にも、動揺不安を重ねた大正九年を考えねばならぬであろう。[6] 新人会も、世界不安！これが現下の適切なる時代標語である、[7] としている。雑誌『中央公論』は、「世界人心の不安動揺」をテーマに特集論文を編んだ。[8] 世界的経済不況、労働不安、革命ロシアの対外戦争などが、動揺不安の主な引き金であつた。[9] わが国においては、不景気の影響は大きかつた。明日のパンを欲する声を配慮しなければならない。「人はパンのみにて生くものにあらず、けれどもパンなくしては生くことが出来ない。今の人は此パンに安定がない。社会とか、温情主義とか人道とか、正義とか、名は正しくて且つ人を動かす力も大なるには相違ないが、『温情主義』はパンの代りにはならないのである。『正義』『人道』も感冒の薬にはならないのである。」[10] と労働組合の機関誌は主張した。現実の生活難の時代には、個人格の向上や解放という穏やかな改造論よりも、急進的に社会組織の変革を主張する思想に傾斜しがちである。

『デモクラシイ』は、その思想的基調において、新カント派哲学の影響を受け、人格向上にこそより高い価値を認める姿

勢を披瀝した。[11]『先駆』も、新カント派の影響より出発している。[12] これらは、第一次世界大戦後のわが国思想界を風靡した社会改造論の傾向と大同小異であつた。この二誌を引き継いだ『同胞』の刊行時期は、前述のように一般の思想状況において社会改造論が「物的改造論」と「心的改造論」に分極化していた。この際、新人会が『同胞』において選択した立場は、個人格の向上や解放を主張する「心的改造論」ではなく、この立場から階級的対立観念として批判されたアナーキズム、サンジカリズム、ギルド社会主義、ボルシェヴィズムなどの社会組織の変革を主張する「物的改造論」であつた。生産組織を現在のままに放置したままで、いかに労働非商品説を叫んでも効果はない、[13] と結論した。新人会は、約二年の歩みののち、個人格の向上や解放という主張から、人間を支配する物質的環境の変革へと目を転じたのである。以下本稿は、『同胞』誌上において、このような思想傾向がどのように展開されたか、またそのなかでわれわれが新人会研究において一貫して探求している「新人会の思想」の核心がどのように表出しているか、[14] を論究するものである。

(1) 『同胞』は、菊倍版八頁、定価十銭、編集発行兼印刷人は一、二号が赤松克麿、三―七号が新明正道、八号が千葉雄次郎、印刷所は冬夏社工場（東京牛込早稲田鶴巻町三六二）、但し七号のみ早稲田印刷株式会社とあるが、所在地は冬夏社工場と同じである、発行所は新人会（東京市本郷区駒込上富士前町五）であつた。『同胞』八冊のうち、三号（大正九年十二月）、六号（同十年三月）、七号（同十年四月）八号（同十年五月）が発売禁止処分を受けている。取締り当局資料によつて知ることができた発売禁止処分の概要は以下の通りである。六号、三月九日禁止、差押部数五一。七号、四月十二日禁止、差押部数六三。八号、五月六日禁止、差押部数五四。理由は全て安寧秩序紊乱であつた。（日本近代史料研究会『大正後期警保局刊行社会運動史料』＜同研究会昭和四十三年十二月＞　二三一―二三二頁）。

(2) 「上富士前町から」（『同胞』第一号　大正九年十月　八頁）。

(3) 吉野作造「横断的対立より縦断的対立へ」（『中央公論』第三十五年九月号　大正九年九月　一一三―一一七頁参照）。

(4) 右同　一一四頁。

(5) 『中央公論』（右同　八七―一三四頁）は、「物的改造論より心的改造論」を特集し、当時の「物的改造論」を批判している。執筆者とテーマは以下の通りである。金子筑水「実際問題と理想問題」、土田杏村「労働哲学改造の方向」、本間久雄「動活享楽・個性伸長」、野村兼太郎「社会改造に於ける理想的要素の意義」、吉野作造「横断的対立より縦断的対立へ」、阿部次郎「改造雑感」、大島正徳「改造原理としての自由と愛」。

(6) 「動揺不安の一年」（『労働』第九巻第十二号　大正九年十二月　巻頭言）。

（7）「万物は流転す」（『同胞』第一号　一頁）。

（8）「世界人心の不安動揺に対する悲観説楽観説」（『中央公論』第三十五年十一月号　大正九年十一月　六〇―八六頁）。なお執筆者名とテーマは以下の通りである。室伏高信「世界不安の意義及将来」、湯原元一「世界人心の不安動揺について」、土田杏村「現実悲観と理想楽観」、三宅雪嶺「不安を感ずる者の悲哀と満足」、吉野作造「自信あり創造力あるものは楽観して可なり」。

（9）「年初より欝結して居た英国炭坑夫の罷業騒ぎは到頭大爆発を遂げた。伊太利には過激主義の工場占領行はれ、有産階級の胆を冷した。労農露国は波蘭土と干戈相見え、北欧の天地をして腥風の吹き荒むに任せた。（略）国内的には普選運動の白熱化は、遂に議会を解散の余儀なきに至らしめ、世界的不景気の襲来は、我国の産業界の萎靡沈滞を招来した。（略）旧社会の権威は最早全く地に墜ちた。而して新社会の準備尚未だ成らず。混沌無明の裡に其進路を迂りつゝあるもの、蓋し世界の現状である。」（前掲「動揺不安の一年」）。

（10）「労動不安」（『労働』第九巻第四号　大正九年四月　三頁）。

（11）中村勝範・内川正夫「『デモクラシイ』の思想」（『法学研究』第五十二巻第二号　昭和五十四年二月）参照。

（12）右同　および中村勝範・吉田博司「『先駆』の思想」（『法学研究』第五十二巻第十号　昭和五十四年十月）参照。ちなみに、赤松克麿「カントと我等」（『先駆』第一号　大正九年二月　七頁）は「不朽の哲人カントは依然として我等の思想の故郷である」としている。

（13）「寧ろ商品を羨む」（『同胞』第七号　大正十年四月　一頁）。

（14）中村、酒井の他に内川正夫（法学修士）、吉田博司（東京成徳短期大学講師）で、一九七八年七月より「新人会研究会」を設け、共同研究をおこなっている。われわれの共通の問題意識については、前掲「『デモクラシイ』の思想」、同「『先駆』の思想」を参照されたい。

二　経済不況と労働運動

わが国経済は、大正九年三月以降、世界的不景気に捲き込まれ、恐慌の激浪に襲われた。工場の閉鎖、生産の急激な減退、中小企業の没落などとともに失業の増加と賃金低下の傾向とが招来され、勤労大衆の中に労働不安が生じた。労働争議は激減し、組合の態度も攻勢より守勢に転じ、一方で急進的な無政府主義的サンジカリズムの思想が、労働運動の中に抬頭してきた。[1] 不景気来襲とともに、わが国言論界には、それに関する多くの論説が発表された。その中心には、経済上の常則として好景気と不景気とが互に相循環するものである以上、不景気に襲われたからといつて悲しむこともあたらないし、憂

うにも足らない、という達観した見方[2]や、好景気時代の成金的膨張への戒めの調子[3]がみられた。さらに、不景気の国民思想への影響を気に掛け、窮して乱すのたとえ通り不景気によつて国民生活が窮迫すれば、国民思想が悪化し不穏な考えを生じさせようとの観測[4]もあつた。しかし、『同胞』刊行中の新人会には、経済不況は観察の客体にとどまることなく、立ち向うべき対象物として意識された。不景気襲来と共に労働争議が少くなつたのは事実と記し[5]、不景気という言は労働者達の耳には強い恐怖の響を伝える[6]、と意識することにより、新人会は『同胞』の時代を開始したのである。

不景気の影は各方面にも及んでいた。新人会には、遠く北の同胞から不景気に侵された北海の島人の生活が伝えられた。秋、不景気の風に肌寒き島人達は黄み行く木の葉にひとしお哀愁を唆られる、訪ずれる冬期の半年、馬鈴薯を嚙りつつ従順に跪かざるをえない、詩のように美しい自然の楽園に生の悲劇がもたらされる、時代は呪われている[7]、かような意味の通信であつた。資本主義の経済とは縁遠い筈の北海の島だが、不景気の波は北端の自然の楽園をも侵食するという意識であつた。北海の島にしてそうであれば、ましてや各都市、各地方、各村、各生活部面において、不景気下の資本主義に侵されないところはないというものであつた。新人会は経済不況が労働者本来の世界である労働現場をも侵食していると見ている。彼らは北九州工業地でその現場を目撃した[8]。労働者の世界は仕事場にある、緊張した労働にある、ここは賃金、生活費、快楽、苦痛を超越して潑溂たる力を発揮する無我の境である、と書いた。しかし、この緊張した刹那々々、それは彼等労働者が自らのあるべき状態を直視したとき消え失せるべきものであろう、という。もはや、無我の世界にも、自らの境遇の意識が入り込まざるをえないというのであつた。

不景気は、労働者を死活問題としての失業で脅やかした。労働者はやむなく猫のように従順になつて資本家のいうままに働かざるをえない[9]現実となつた。しかし、同じ職場で同じく資本家に雇われていながら、不景気の波濤の及ばぬ人びとの存在は、新人会にとつて承認できぬものであつた。すなわち、技術者たちが「社会思潮の外に超然たる生活を送つて居る[10]」事

実に、新人会員は驚きを示したのである。恰も機械のように物質の中に没頭した技術者たちの目には、人間としての労働者は映じない、と怒りを向ける。この種の人間は、せいぜい数字をひねくりまわして、能率の増進を考えるような感情の硬化した人達であつて、資本主義社会がそれ自身の有用のために機械のようにつくり上げ、生命をとりあげたもの、と見るのであつた。[11] まさに資本主義の物質的環境に支配された人間の典型であり、不景気においては一層際立つものと映つた。

「麺麭の道徳」という言葉は、新人会が用いたものであるが、それは経済不況下、生活不安から立ち上つた労働者の立場を代弁した。すなわち、麺麭の要求は決して空虚な風のごときものではない、すでにこの声は社会に向つて、否特権階級に向つて、鉄槌のごとき威嚇と成りつつある、という。[12] 労働者が生存のために麺麭を要求することを当然とした新人会には、これを要求することが社会改造を進めるものであるとの観念が伺える。前出「麺麭の道徳」の道徳の意味を、社会の正当なる創造と進化とを拒絶する悉皆の制度に対する反抗、[13] と定めた新人会であつた。

経済不況下のわが国労働運動は、大正九年後半より、サンジカリズムの影響を受け急進化した。『同胞』には、このサンジカリズムの影響が顕著に見られた。創刊号では、我等の国家は資本家と労働者の二階級に分裂している、両者は和解の余地なく、同盟罷業や同盟怠業の勃発しない場合でも、仇敵同志の関係である、国家道徳云々の問題ではない、我等はかの『労働者階級は資本家階級と共通なる一物をも有せず』という世界産業労働同盟の宣言の冒頭の句を無条件に承認せざるを得ない、[14] とIWWの精神を受容するとした。新人会は、このサンジカリズムの色彩濃いIWWの規約前文の一句[15]を註釈した。IWWはその人数に比べて、侮るべからざるものだ、彼等は皆勇敢であつて、近来多くは過激派に化して活動している、[16] と解説している。サンジカリズムの影響は、労働組合をもつて、産業的に地方的にまたは国家全体に渉つて総同盟罷業を行い、資本家と戦い、産業全体の管理権を自分達の手に収めて人類全体にとつて幸福な世界を作らうとするものである、[17] というところに見ることができる。労働組合の役割は、資本家との戦争において「労働者の戦闘艦」[18] であるとした。大正十年はストライキ

の暴風が全国的に吹きまくつた年であつたが、『同胞』には、東京足立製作所（一月）、日本鉄工株式会社（一月）、園池製作所（三月）、巣鴨ナプォルツ時計工場（三月）、足尾銅山（三―四月）の各争議の報告文が掲載されている。[19] このうち、サンジカリズムの傾向の最も強い東京鉄工組合所属の足立製作所の争議は、工場襲撃、工場主・事務員の傷害、機械の破壊をともなつたものであつたが、新人会は工場に押寄せた一団が工場主に制裁を加えた、[20] とこの組合の暴走を支持した。サンジカリズムの特徴でもある階級意識を強調しているのは、第七号である。[21] サンジカリストは労働者の数の力よりも意識の力を尊重する、その潑溂たる闘争的階級精神を尊重する、ならば優越的少数者出でよ、階級意識の熾烈なる少数戦闘者出でよ、彼等の精神と運動とに多数は熱狂して従うであろう、というのである。労働組合の規模の拡大は、返つて闘争心を弱めるという趣旨である。新明正道は団結を大きくしようとする努力よりは闘争という一方面に着目して邁進すればいいのだ、[22] と記した。最終刊の第八号には、同盟罷業のための結合といわれる「三角同盟」が紹介されている。三角同盟は、英国における革命的サンジカリズムの集中的表現と見られるものであつた。[23]

『同胞』の誌面はこのようにサンジカリズムの色彩を帯びるものであつたが、様々な角度からの論述には次のような共通点があつた。それは資本主義制度の起る以前の社会は幸福であつた、という意識であつた。その社会が中世のギルド組織であるという。[24] そこでは、すべての人が友達のような気持になつて楽しく暮していたが、機械文明の発達によつて、親方と雇人との間の親密な関係が失われた。「昔の親方はすつかり雇人と友達の気持で一緒に働き同じ利益をわけ合つて居たから働くということに対して深い思いやりがあつた。だから、たとえ其仕事が少しは苦しくとも皆が力を合せて働くのだという気持と、出来上つた品物から得る利益を皆が公平に分配するのだという考えから皆が喜んで働いて居た」[25] という。近代以前の社会の小規模な生活単位であるギルドを、来るべき国家社会の理想のモデルとするものであつた。ここにギルド社会主義思想の影響をみることができる。わが国では、社会改造論として、サンジカリズムが絶頂に達する大正十年より前、ギルド社

会主義も一つの流行思想として影響力をもつた。[26] 室伏高信がナショナルギルド（全産業の全生産者の団体）の建設を提唱したことは知られている。[27] サンジカリズムとギルド社会主義とは概して共通した点の多い思想である。わが国内の思想状況においても、サンジカリズムとギルド社会主義の要素が混ざり合うことは不思議ではなかつた。新人会では、大正九年十月、第二回学術講演会において、室伏高信を講師にギルド社会主義を取り上げている。[28]『同胞』第三号は、シドニー・ウェッブ（Sidney James Webb〈1859-1947〉）を批判したが、[29] ウェッブはナショナルギルドの建設を提唱するギルド社会主義者から、社会問題の核心を見誤つているとして批判されていた。[30]

サンジカリズムは、労働者を賃金奴隷の地位におとした資本主義制度の根本である賃金制度の廃止を叫び、組合を資本主義社会における闘争の主体とし、それをまたプロレタリア革命後の未来社会における基礎組織としようとする理論および運動であつた。[31] 新人会は、現在の世の中で大多数を占める労働者が人間らしい生活ができない原因が、資本主義の賃金奴隷の制度にあるのではないかという考え方をとる。[32] 資本主義が成立する以前の社会では、皆が不公平もなく不愉快もなく生活できたが、これを破壊したのが賃金制度だという。勿論、資本主義以前の社会が幸福であつたと考えるのは観念の産物以外の何ものでもないが、そこに幸福な社会を認めていることは確かであつた。これは新人会が資本主義の発達によつて破壊された人間関係の回復を求めていることであつた。過去に理想のモデルを求め、その社会組織を現下に実現すれば、親密な人間関係の生きる幸福な社会がもたらされるであろうという意識がそこにあつた。これは麻生久が『デモクラシイ』に書いた「農村の生活」と同じ考え方であり、[33] ここに無意識のうちに共同体社会を憧憬していた新人会員の本質が表出していた。

このようにサンジカリズムやギルド社会主義の影響を前面に見せる『同胞』ではあるが、一部分これらに反する労働組合主義の立場も垣間見ることができる。労働組合主義の立場は、過激な直接行動を排し、着実な漸進的手段によつて労働者の要求を実現していこうとするものであつた。新人会の先輩、麻生久、棚橋小虎らが友愛会において指導しようとした立場で

あつた。大正十年一月、棚橋のサンジカリズム批判の一文「労働組合に帰れ」[34]が発表されて以後、労働組合主義の立場へのサンジカリストからの批判攻撃は一段と厳しかつた。右のサンジカリストの攻勢を受けながら、この立場が首尾よく解決した争議に大正十年三月から四月にかけての足尾銅山争議があつた。組合の承認と待遇改善を要求するこの争議は、暴力行為の発生を避け、話し合いによつて穏健な事態の解決に至つた。赤松克麿は、予は生まれて始めて一糸乱れざる労働運動の訓練を見た[35]、と述べている。『同胞』誌上、労働組合主義の立場はサンジカリズムのように派手なアピールを見せることはなかつたが、創刊号以来の地方労働者との接触の記録を通じて、この立場は伺えるのであつた。北九州の炭鉱[36]、北海道夕張の炭鉱[37]、足尾銅山[38]の肉体労働者が新人会員の訪問相手であつた。新人会員は、結成以来の「ヴ・ナロオド」の意識で、これら労働者との接触をつづけていた。なかでも足尾はたびたび足を運んだ鉱山であつた。この地に立つた新人会員は、わが国労働運動の発祥地に、資本家の圧政に犠牲となつた労働者を見たという。そこでは酷使と過労と病苦から死んだ犠牲者は、現世のみならず来世においても、天下類のない荒寥落莫な所を墓地とせねばならぬ程悲惨であると記した[39]。死後の世界においても、この地には安らぎがないというわけである。このような現場に立つた新人会員は、労働者が生活の安らぎを取り戻さねばならぬと深刻に考えるのであつた。新人会は、平和な生活を回復しようとのこの一点の意識において、サンジカリズムやギルド社会主義に圧倒されながらも、労働組合主義をも内包しうる余地をもつていたのである。

(1) 赤松克麿『日本社会運動史』(岩波書店　昭和二十七年一月十五日)一七三頁参照、および末弘厳太郎『日本労働組合運動史』(日本労働運動史刊行会　昭和二十五年九月十日)四七頁参照。

(2) 「不景気の時代に、諸物価が低落し、諸株式の時価が圧迫されたならば、従来好景気の時代に、是等の価格騰貴の為めに、利益を占めて居つた人々は遂に不利益の地位に陥るには相違ないが、国富なり、国力なりの上から見たならば、之が為めに別に大なる打撃を蒙つた訳ではない。単に従来通貨の形で代表されて居つた富が幾分か減少するに止まるに過ぎない。寧ろ不景気時代に一方に物価が下落して、国民生活を安易にし、又金利歩合が上進して、貯蓄を奨励し、両者相俟つて、次第に国民の資力を充実させ、他の一方に不景気時代の圧迫に堪えずして、両三年来濫興された幾多不確実なる事業に淘汰を来したならば、却て経済社会全体の基礎を堅実にすることの出来る道理である。」(堀江帰一「不景気の襲来と我国民生活」『中央公論』第三十

五年四月　大正九年四月　七一頁〉。同じく三宅雪嶺「不景気から起った悲喜劇」（『中央公論』第三十五年十月号　大正九年十月）など。

(3)　「遽かに汐がさして来たというので、有頂天になり、株の、豪者のと騒いで、城門を高うして、歌舞宴楽しておる間に、汐はいつしかひいて、游げなくなつた大小魚の観が、最近のわが国民にはあるでないか。」（杉森孝次郎「新経済人のスケッチ」〈『中央公論』第三十五年十月号　大正九年十月　六一頁〉）。

(4)　「不景気の国民生活に対し、又国民思想に対する影響は如何なる形で、現われるであろうか。之を一言にして云えば、国民思想を悪化するに至るのである。」（堀江帰一「不景気の国民生活及び国民思想に対する影響と教訓」〈『中央公論』第三十五年十月号　大正九年十月　六八頁〉）。

(5)　「不景気時代と労働運動」（『同胞』第一号　大正九年十月　三頁）。

(6)　「北九州工業地を巡りて」（右同　七頁）。

(7)　「投花一束」（右同　八頁）。

(8)、(9)、(10)、(11)　前掲「北九州工業地を巡りて」。

(12)、(13)、(14)　「麺麭の道徳」（右同　二頁）。

(15)　「『公平な労働に対する公平な賃銀』という保守的な標語の代りに、我等は我等の旗に『賃銀制度の廃止』といふ革命的な警語を銘記しなければならぬ。」（「新しい文句の註釈」〈右同　第二号　大正九年十一月　六頁〉）。

(16)　右同。

(17)、(18)　「労働組合の話」（右同　第三号　大正九年十二月　三頁）。

(19)　「失業と労働者　㈠足立製作所の争議、㈡日本鉄工株式会社の争議」（右同　第五号　大正十年二月　四―五頁）、「園池製作所の争議」（右同　第七号　大正十年四月　四頁）、「時計工の争議」（右同）、「足尾事件報告会」（右同　第八号　大正十年五月　六頁）、「足尾事件を顧みて」（右同　七頁）。

(20)　前掲「失業と労働者」（四頁）。

(21)　「階級意識に就て」（右同　第七号　五頁）。

(22)　「組合の価値」（右同　第六号　大正十年三月　四頁）新明正道はＭＳ生のイニシャルを用いて執筆した。

(23)　『新版社会思想史辞典』（創文社　昭和三十六年十二月十五日）　四一七頁。

(24)　「自由労働と奴隷労働」（『同胞』第三号　二頁）。

(25)　前掲「労働組合の話」。

(26)　例えば、大日本労働総同盟友愛会機関誌『労働』には、「資本専制主義を排す」と題した次の一文がある。「昔、機械というものゝ発明されない前は、人間同志の間に、今のやうに貧富の懸隔というものがなかつた少しばかりの材料や手道具で、いろ〳〵なものを製作し、人はお互に其需要を充たして居た。然るに十八世紀の中頃以後になつて、急に種々の機械が発明され、動力が応用されるようになつてから、工業の規模が急に大きくなり、煙突林立、人口集中、貧富懸隔という社会現象を生じ、遂には百円より千円、千円より一万円、一万円より百万円、千万円と、資本の高の増すに従つて、益々

能率が挙り、収益が増して来るところから、資本の大合同が行われて、労働者は全く小さくなつて資本家の前には奴隷同様に圧迫されて居なければならなくなつた。」（第九巻第六号　大正九年六月　一頁）。

(27) 室伏高信「ナショナルギルドの建設」（『改造』第二巻第四号　大正九年四月　四一―六一頁）、同「ギルド・マンの自由」（右同　第二巻第五号　同年五月　五一―六一頁）。

(28) 新人会第二回学術講演会は、十月二十五、六、七日、帝国教育会で開催された。室伏高信は「ギルド社会主義の発達及其原理」と題して講演した。他の講師と演題は以下の通りである。北沢新次郎「労働組合の諸問題」、有島武郎「ホイットマンに就いて」、長谷川如是閑「ソリダリティの法理」（「上富士前町から」＜『同胞』第二号　八頁＞）。

(29) 「シドニー・ウェッブ」（右同　第三号　六頁）。

(30) 「現在のナショナルギルドの主張者は手厳しく、ウェッブ一派のフェビアン協会の社会主義者を攻撃する。何となればウェッブ等は社会問題の核心を救貧問題に置いているからであると言う。」（土田杏村「労働哲学改造の方向」＜『中央公論』第三十五年九月号　大正九年九月　九三頁＞）。

(31) 『政治学事典』（平凡社　昭和二十九年二月十八日）　五三五―五三六頁参照。

(32) 前掲「自由労働と奴隷労働」。

(33) 麻生久「小説　農村の生活」（『デモクラシイ』第四号　大正八年六月　一七―二〇頁）、および中村勝範・内川正夫「『デモクラシイ』の思想」（『法学研究』第五十二巻第二号　昭和五十四年二月）参照のこと。

(34) 棚橋小虎「労働組合に帰れ」（『労働』第十巻第一号　大正十年一月　四頁）。

(35) 赤松生「足尾事件を顧みて」（『同胞』第八号　七頁）。

(36) 前掲「北九州工業地を巡りて」、「築紫路の旅」（右同　第六号　五頁）。

(37) 「奥の細道」（右同　第五号　七頁）。

(38)、(39) 「足尾紀行」（右同　第二号　三頁）。

三　革命ロシア

新人会が、今日の労農露西亜は実に社会改造の世界的実験所である[1]、との書き出しから革命ロシアの国家構造に言及したのは、革命後約三年を経過した『同胞』創刊号においてであつた。新人会は『デモクラシイ』発刊以後、幾度か革命ロシアへの共感を示してきたが、革命の実相及び国家構造に言及したことはなかつた。新人会を含めてわが国内には、革命ロシア

に関する情報が不足していたことは否定できない。[2] それでも大正九年後半に入つて、革命ロシア政府が国内の反対勢力を掃討し、連合国側の武力干渉と経済封鎖に耐え切つて国家の基礎を固めるにつれ、その内情も徐々に明らかになつてきた。[3] 新人会は、この国家基礎の固まりつつあつた革命ロシアを、その基礎は揺ぎない、一部偏狭な観察者の言うような吹けば消えるシャボン玉ではない、[4] として諸機構の積極的な紹介にあたつた。しかし、国家機構成立の前提であるレーニンの革命政府樹立については、『同胞』全号全頁中、僅か数行触れられるにすぎない。レーニン（Vladimir Ilich Lenin〈1870-1924〉）は一九一七年三月の革命が、無産者を食い物にするだけである、政権を無産者の手に移さねばならないと計つた、独探と罵られ、国賊と言われ、身に危険が迫つたが、レーニン一派の勢力は不思議にも日一日と増した、少しでも自覚した労働者や兵卒は、彼の旗の下に馳せ参じ、遂に十一月の革命はなつた、これが本当の無産者の革命である、[5] と記すのみであつた。レーニンが政権の獲得維持に用いた強圧手段、反対勢力との闘争については、言及されていない。当時、わが国にはレーニンの強圧手段や闘争が知られていたが、新人会の目はその基礎の固まりつつあつた国家機構と労働者の生活に引き寄せられていた。

革命ロシアの国家構造の基礎はソヴィエット制度にあつた。新人会はこれを紹介した。[6] ソヴィエットは、ロシアが一九一七年秋、ケレンスキー時代からレーニンの時代に移る時期に陥つた無政府状態を救い、秩序を回復させたところから登場した、これは社会的に有意義なる仕事をなす各団体の代表者の集合団である、各都会のソヴィエットの代表者、各州のソヴィエットの代表者とから全露ソヴィエット会議が構成され、そこから中央執行委員会が選ばれ、さらに上級機関として人民委員会（内閣）が置かれる、と組織を略述した。その上で、ソヴィエット制度には好意的な解釈がなされた。レーニンの地位については、この内閣の議長に過ぎない、ゆえにいつでも内閣によつて罷免することができる、[7] と説明するのであつた。たとえレーニンたりとも、制度的には拘束しうるのだというわけである。ボルシェヴィキについては、これはソヴィエット内部における一政党である、現時に最も有力なる政党であつて、日本の議会でいう政友会の如きものだ、レーニンはそ

の政党の首領なのである、ゆえにソヴィエット制度を顚覆しなくても、平和的にボルシェヴィキを抑圧することもできるわけである[8]、と過激派政府のイメージ払拭を配慮しているようである。このソヴィエット制度が如何にして代表を選出し、運営されているかの記述は『同胞』刊行中に一箇所も登場しなかつた。大正九年五月から六月にかけ、バートランド・ラッセル（Bertrand Arthur William Russell〈1872-1970〉）は、ソヴィエット制度が新しい形態として代議政治に優つているかどうかの興味をもつて革命ロシアを訪問したが、何の研究もなしえなかつた。代議制の前提である自由な選挙制度が存在しないからであつた[9]。これはわが国社会主義者も知ることができた。山川均は、意図は異なるも、このラッセルの見聞をその論稿の中で取り上げている[10]。ソヴィエットの独裁政治については、西欧デモクラシーの立場から、またマルクス主義陣営内部から、それぞれ非難があつたことは、当時の社会主義雑誌のなかにも触れられているところであつた[11]。新人会はソヴィエット制度を支えるものの中に、その負の面を相殺しても余りある心惹かれるものを感じていたのであろう。既述のごとくソヴィエット制度が社会的に有意義なる団体の代表によつて構成されると述べた新人会は、ソヴィエット制度のなかに母の会も職業組合と等しく代表を送つていることを注意すべきであると指摘した。今日ロシアでは、家庭の処理と育児は、社会的有用事業の最高級に挙げられているからだという[12]。現下日本の経済不況と対比した場合に、労働者の生活基盤である家庭や家族が大切にされ、全ロシア一体となつてソヴィエット制度を盛り立てているという新人会の認識が、ソヴィエット制度の代表選出形態、運営形態などの実際面に対する評価に優つた。

革命ロシアのソヴィエット制度の基礎には、新人会が「国民皆労主義」と称するものがあつた。新人会は、十八世紀末に資本主義が成立する以前には、働くものが幸福な時代であつた国民皆労主義の時期があつた[13]という。この思考の基礎には、前節のギルド社会主義の影響を見ることができる。すなわち、新人会には、資本主義の経済組織の成立が労働の分業をもたらしたという認識があつた。すなわち、土地から農民を、生産手段から労働者を切り離したのに対し、資本家の手には生存と

もつとも密接なパンが握られた、ここに現下の生活の悲惨が由来する、という認識である。資本主義の経済と機械文明がもたらした労働の分業が、働く者と寄生する者との二階級の分化対立を生み出し、よき時代の国民皆労主義を破壊した元凶と見るのであつた。[14] しかるに、革命ロシアにおいて、新しい国家機関の手によつて、働く者と寄生する者との二階級分化対立は一掃され、皆労主義の実現がなされているという。一般児童は八歳から十七歳まで統一労働学校に就学し、綜合的労働教育と知識教育との完全な協調の下で教育され、国民は知識階級、筋肉労働者階級、産業支配者として送り出される、また三歳から八歳の間においても、幼稚園教育によつて、社会主義的思想の根底を教え込まれている、[15] と紹介する。新人会は、革命ロシアにおいてソヴィエット制度を支えている国民皆労主義が、資本主義の悪弊である二階級の分化対立を一掃し、その基礎を固めつつあることに、昔の幸福な時代の再興を期待した。新人会は自らを含めて、将来いつか再び皆労主義の時代が来ることが、人類の正しい文化の進歩を仰望する者の確信であるとの立場を示したうえ、革命ロシアにおいては国民皆労主義は実現された、[16] と断定したのである。皆労主義は直ちに労働を人びとの尽きざる歓びとなすわけではない[17] としながらも、理想への確実な接近であると受けとめたのであつた。

新人会が極めて新しい研究であるとして取り上げた消費組合の組織も、同様の視点で眺めることができる。革命ロシアの消費組合は、ロシア国内における生産高分配の唯一の機関であつた。これは資本主義時代より存在したものを、革命後において食糧の社会主義的分配の機関となし、私有財産に拠らざる国営生産の機関として改造を計られたものであつた、[18] という。新人会は何に惹かれたのであろうか。前述のごとく、新人会は資本主義制度が勃興する以前の時代を幸福な時代と想定し、その典型としてギルドを紹介していた。ギルドは親方と職人とが互いに共同的精神を持ち、その間柄は至極円満であつた、共同の利益のため、製品を厳密に審査し、価格を公定し、粗製濫造や奸商等は容赦なくこれを処罰し、また需要供給を調節していた、[19] という。ここに、新人会は労働者が中世のギルドの時代のごとく、自分で生産の道具をもち、生産物を支配

することが出来れば、機械の進歩した今日においても、幸福な生活ができるはずだという観念に達することができた。現実の革命ロシアは、資本主義経済が崩壊し、労働者が生産の道具をもつに至つた社会と映つた。その中で、消費組合は生産高分配の唯一の機構として、共同の利益のために生産高の分配に当つている。これは、労働者が生産の道具と生産高の分配の双方に力を得た状態が成立したわけである。革命ロシアは新人会が観念の上でモデルケースと描いた資本主義成立以前の幸福な時代の到来を思わせる状況であつた。新人会による革命ロシアの国家組織への評価は、中世ギルドをモデルにした社会像と合致する点において可とされた。

新人会は、革命ロシアでは、労働は神聖なりという標語が字義通りにそのまま全社会に実現する[20]、という。労働は社会生活の基本的義務であり、労働者は知識階級となり、筋肉労働者となり、産業支配者となりうる、労働が人格化するというのである。日本の労働者の状態は、不況の波をかぶり、資本家の奴隷のごとく、その生活は悲惨であると考えた新人会の認識からすれば、革命ロシアの労働者は理想の状態にあるとの意識を表わしているようである。しかし、革命ロシアの労働者の生活実態には、何の言及もなかつた。世上には、革命ロシアの労働者は全資本家勢力を掃蕩し、ブルジョワ勢力を圧服したが、彼らには何の自由もなく解放もなく、資本主義配下にあつたと同様、若しくはそれ以上の強圧と束縛と疲労と、窮乏と、飢餓に苦しんでいる、との指摘があつたが[21]、『同胞』を全号通して、革命ロシアの労働者が強制労働の苦役を負つているといつた種類の指摘は皆無であつた。むしろ、憲法及び労働法に規定された強制労働は、「国民皆労主義」の現われとして受け入れようとしていた[22]。既述のごとく、新人会は人類の歴史には幸福な皆労主義の時代があつた、しかるに資本主義の経済組織がこれを破壊し、労働者と寄生者の二階級を生みだし、幸福な時代を過去のものとした、としている。過去には確かに親方・雇人の関係はあつたが、友達の気持で一緒に働き同じ利益をわけ合い、働くことに深い思いやりがあつた、苦しい仕事にも皆が力を合わせて働くことができた[23]、という。労働者相互の間に情誼が通い、相互の扶助が可能な時代があつたと想定

しているのである。この幸福な時代において、あつてはならぬものは、一方が他方に寄りかかる寄生生活であつた。[24]「平和な世界」を破壊したのが資本主義経済による労働の分業であつた。[25]「平和な世界」の回復には、その破壊の元凶である資本主義とその労働の分業を排して、寄生階級のいない、「皆労主義」の社会を実現することであつた。その点、革命ロシアの強制労働の法規は、国民皆労主義の実行と映つた。「皆労主義」が実現すれば、労働者による平和な世界がもたらされる、革命ロシアはその実証の場として期待されたのであつた。皆労主義という観念自体、小地域の、あるいは小規模単位の労働において成立するものであろうが、新人会はこれを国家単位に拡大したのであつた。

新人会はレーニンについて第一等の評価を下した。[26]新人会におけるレーニンの評価は、彼の「美しい清い人格」に集約された。レーニンは民衆の力というものに絶大な信仰を置いている、レーニン自身には民衆の非常なる信頼が集まつている、という。おごらず、たかぶらず、質朴な生活を送り、なおかつ一日十八、二十時間を下らぬ労働をしている、と称賛した。レーニンの姿勢にみられる「美しい清い人格」は、新人会員自身の「あらねばならぬ」意識と重なつていた。レーニンの革命家への転身の動機も、新人会員の立場をくすぐるものであつた。レーニンの「幼年時代から少年時代にかけての家庭は誠に温かい幸福なものであつた。然し自分の家庭に於ける幸福な生活が当時のロシアの民衆の生活と余りにかけ離れたものである事に気着いた時彼の心は動揺せざるを得なかつた」[27]と記したのである。

要するに、新人会は革命ロシアを資本主義経済組織によつて人類が一度失なつた平和な世界の回復に向わんとしている実験場として評価した。有力雑誌における、ボルシェヴィズムは全く人類天賦の共存性を無視し、個人の自由を褫奪し、我等の生存理由を全く無意義、無価値ならしむるものであるとの批判[28]とは、立つ次元が異なつていた。新人会は共同生活の場が平和にして相互扶助的になることにプライオリティをおいていたと思われる。僅かに一句見られた独裁政治への言及も、この独裁政治は過渡期時代においてやむを得ざることとあり、[29]さらにこれは、クロポトキン（Pytor Alekseevich Kropotkin <18

42-1921〉）の立場を援用することで補強された。「力の否定の為の力の肯定！之は、クロポトキンの立場からしても、止むを得ない手段かもしれない。曽て、瑞西の暴動に加つて活動した壮年の意気が、今も彼の脈管を流れて居るならば、彼も現時の労農政府の施政を肯定して居るのかもしれない」[30]という。新人会は、アナーキズムとボルシェヴィズムという本質的に相対立する思想を共に抱擁した。如何なる点において、両者の立場が共存しうるのであろうか。次節以下において、新人会のアナーキズム、とくにクロポトキンの思想への共感を解明しながら、この問題を検討したい。

(1) 「労農露西亜の国家的構造」（『同胞』第一号　大正九年十月　四頁）。

(2) 大正八年六月十八日、麻生久（筆名・麻山改介）、岡上守道（同・黒田礼二）、佐野学（同・片島新）によつて、『過激派』（民友社）が出版された。これはロシア革命の概要をはじめて日本に紹介した著作であるといわれる（Henry D. Smith II; Japan's First Student Radicals, Harvard University Press. 1972 p. 42. 松尾尊允・森史子訳『新人会の研究』〈東京大学出版会　昭和五十三年十二月二十五日〉三九頁）が、じつは、ロシア革命の実相の分析という面は乏しく、同書の内容の約半分近くは、ロシア社会思想史の記述に当てられている。『過激派』刊行以後から『同胞』発刊以前の時期に限定しても、革命ロシアの内情が十分わが国に伝えられていたとはいい難いためであろう。例えば、「トロツキー殺され、露国過激派政府顚覆」という誤報もあつた。「予てよりレーニン及びトロツキーの施政に嫌焉たる国民は猛然として起ち、総主教ティホンを指導者に擁立しブルシロフ将軍の麾下に集り一挙レーニン政府に肉迫したので、レーニンは風を食つて逃走しトロツキーは遂に殺害され、新にブルシロフ将軍を首相とした新政府が出現した」（『中央新聞』　大正九年六月十一日）という報道もあつた。

(3) 大正九年七月、一年をロシアで送つた大阪朝日新聞特派員中平亮は「露国を脱して」と題し、「初めて赤裸々の露国を紹介せん」とした。「労農政府の基礎は略定まれりと云ふを得べく露国はデニキン、コルチャク両軍の覆没を機として破壊より建設の時代に入れり経済組織の変更は労農政府の全力を注げる所なるも障害多く旧制の破壊は絶望と見られ労農政府は之が為一般労働強制法を布き苟くも労働能力を有する男女を悉く之に服せしめ労働軍を組織して軍隊の力にて産業を復興せしめんとし露国は一大労働国と化したる観あり。然れ共是れ単に外観に過ぎず労働者は営養不良の為め労働能力を失い私有財産制度の破壊と物資の欠乏とに依り勤労の興味を失い或者は病と称し労働を避け或者は作業に出でず労働時間は精々二時間にして他は有耶無耶の裡に空費して労働能率は極度に低下せり。」（『大阪朝日新聞』大正九年七月二十一日）と革命ロシアの真相が報道された。

(4) 「来るべきもの」（『同胞』第七号　大正十年四月　六頁）。

(5) 「ニコライ・レーニン」（右同　第五号　大正十年二月　六頁）。

(6)、(7)、(8) 前掲「労農露西亜の国家的構造」。

(9) バートランド・ラッセル　大山郁夫訳「労農ロシアを訪うて」（『我等』第二巻第十号　大正九年十月）参照。

(10) 山川均「ソヴィエットの研究」（『改造』第三巻第五号　大正十年五月　四五―四六頁参照）。
(11) 例えば、『社会主義研究』にみることができる。大正九年六月刊の第二巻第五号には「ソヴィエット政治の特質と其批判"プローレタリアン・ディクテートルシップとデモクラシー"」が掲載され、ソヴィエットの独裁政治に批判があることを解釈無しで紹介している。
(12) 前掲「労農露西亜の国家的構造」。
(13) 「国民皆労主義」（『同胞』第二号　大正九年十一月　二頁）。
(14) 「自由労働と奴隷労働」（右同　第三号　大正九年十二月　二頁）。
(15)、(16)、(17) 前掲「国民皆労主義」。
(18) 「プロレタリア専制と消費組合」（右同　第二号　四頁）。
(19) 前掲「自由労働と奴隷労働」。
(20) 前掲「国民皆労主義」。
(21) 浅田江村「ボルシェヴィズムの天下」（『太陽』第二十七巻第一号　大正十年一月　二六頁）。
(22) 「自分は茲に労農露国の『国民皆労主義』の模様を少しく述べて見よう。労農露国の憲法の第三条第五項に次の文句がある。社会の寄生階級を除き、国家的の経済生活を組織する為めに、一般的強制労働を採用す。又第十八条に次の言葉かある。露国社会主義者連盟労農共和国は労働を以て共和国各市民の義務と為し、『働かざる者は食うべからず』といふ標語を宣言す。尚ほ労農露国労働法の第一章に次の言葉がある。第一条、露国社会主義者連盟労農共和国の全市民は、第二条及第三条に掲ぐる例外を除き、強制労働に服するものとす。」（前掲『国民皆労主義』）。
(23) 「労働組合の語」（『同胞』第三号　三頁）。
(24) 寄生は「労働せずしてしかも自己の欲望を満たそうとする狡猾なる方法である。」（「労働と寄生」　右同　第七号　三頁）。
(25) 前掲「自由労働と奴隷労働」。
(26)、(27) 前掲「ニコライ・レーニン」。
(28) 前掲、浅田「ボルシェヴィズムの天下」。
(29) 前掲「労農露西亜の国家的構造」。
(30) 「海外時潮――クロポトキンと労農露国」（右同　第一号　六頁）。

四　相互扶助の社会観

クロポトキンは、新人会が『デモクラシイ』を創刊以来、その機関誌に最も多く登場した人物であつた。[1] 生まれもつた富

を捨て栄達の門を自ら閉ざして、[2] 人類解放事業に献身したクロポトキンは、新人会にとつて魅力ある思想家の筆頭であつた。クロポトキンの死に際し、『同胞』は「彼のあのなつかしい人類愛に燃えた瞳も、あの慕わしい相互扶助を説いた唇も、あの頼母しい破壊力をはらんだ腕も、我等には失われて了つた」[3] とクロポトキンを追悼し、葬儀も墓地までの数里の間が参列者で埋まつたほど盛大だつた、[4] と伝えた。新人会は従来よりクロポトキンの人道主義的精神と相互扶助に基づく思想を紹介していたが、[5]『同胞』にもそれは見られた。新人会は、クロポトキンの社会定義をそのまま抜き出し、「社会は人力の最少限度の損失に依つて可能なる最大量の幸福を獲得するの目的の為めに組成せられたる全体である」[6] とした。この目的に到達するための根本要件は「汝が、其時、為されんことを欲するところのもの、それを他人に為せ」[7] という相互扶助の精神に尽きるものであつた。相互扶助の精神は、人類協同の意識というわけである。このような理想社会の例として、クロポトキンはその著『相互扶助論』(Mutual Aid: A Factor in Evalution, 1902) のなかで、アフリカその他の未開の土人たちの生活を描いたことがあつたが、新人会も未開人たちの美しくも調和的な相互扶助の友愛的共同生活を紹介している。[8] また、現下の社会病理の原因は、中世都市の産業ギルドに見られた相互扶助が、資本主義の発達による労働の分業化によつておこなわれなくなつたところにある、[9] とクロポトキンの思想を援用して説明している。

大正九年に入つて、わが国言論界の傾向の一つに相互扶助的な主張がみられた。第一次世界大戦が終了し、人類間の生存競争がおこなわれたことへの反省であつた。大戦は「人類同志の戦いであつた。その反動として、人類的相互扶助熱が時を得んとしておる。大勢は、今は相互扶助の方に傾いておる」[10] というものであつた。大正九年一月の森戸事件後、この事件のセンセーショナルな大きさから、『改造』はクロポトキンの思想を特集していた。[11] このような社会的な環境もあつてか、新人会はクロポトキンの相互扶助的な考え方を『同胞』誌面に投影している。新人会は、国家主義者が我同胞近々二十年の中に、日本魂は西洋文明に毒されたと悲憤慷慨することを、事実として承認するに躊躇せぬと述べたことがあつた。[12] 西洋文明の神髄は

十九世紀の資本主義であつた、十九世紀の文明は競争、即ち争いの哲学を基礎とした、争いとは強者が弱者を征服することだという。ダーウィニズムがちらつくこの十九世紀を「生存競争の高調された時代」[13]とみる立場は、新人会だけのものではなく、当時の改造論の中に共通して見られた傾向であつた。[14] 新人会の主張をさらに続けよう。[15] 征服被征服、掠奪被掠奪の両階級の間には越ゆるべからざる溝がある、これを変革するには、弱肉強食のごとき争いの哲学を排するしかない、資本主義の文明は争闘に立脚するがゆえに争闘をもつてしか清算することができない、階級闘争がその方法である、という。階級的対立観念の表明であつた。それゆえ、次なる社会こそ、闘争のない社会協同即ち和合の哲学を基調とすべきである、協同は相互扶助の社会である、というのである。新人会は相互扶助の社会に至るには階級闘争を手段としたが、これは社会改造論の半面の立場であつて、他の反面とは対立するものであつた。すなわち、人間である以上、生存のための競争はいかにしても避けられない、しかし生存競争は個性競争でなくてはいけない、相互扶助は個性の協力でなくてはならない、個性のためという条件で競争も協力も合致しなくてはならない、という立場[16]とは異なるものであつた。

ここで述べられた相互扶助の思想は、新人会が紹介してきたクロポトキンの影響によるところも大であるが、これのみに限定するのは不十分であろう。大正九年に入つて主張された「社会連帯」(La solidalité sociale)[17]が合わせて考えられなくてはならない。社会連帯は、社会を組織する個人は根本において密接なる社会的鏈繋の理法によつて支配せられ、この理法の上に立つて各個人が社会において連帯的生活を営むに非ざれば、人類社会の完き発達は望むべからずと主張するものであり、「和合」(entente)の法則とも「生命の合致」(union pour la vie)の法則ともいわれた。[18] 社会連帯の思想は、クロポトキンの思想と密接なる関係があるとして紹介されたことがあつた。[19] 新人会は、大正九年十月、第二回学術講演会において、長谷川如是閑が「ソリダリティの法理」を取り上げている。[20] 相互扶助の思想は社会連帯の思想と混然となつて新人会員の意識の中に受け入れられたのである。

この相互扶助も社会連帯の思想も、これを受容した新人会から見れば、決して外来種のものとは思われなかつた。その思想は来るべき社会の理想ではあるが、じつはかつて存在した好ましいものであるという観念があつた。新人会の農村観にこれを見ることができる。すなわち、現下の農村では人間は主人と奴隷に分かれ、獅子と馬とに分かれている[21]、このような地主と小作人との隷属関係は「農業の資本主義化」によつてもたらされた[22]、と『同胞』は記した。地方会員のなかには、都会的文明が、土民の生活にとつて恐ろしい威嚇であり、恐怖であり、生存拒否の脅迫である、郊外の肥えた麦畑、見渡しのいい丘が都会的文明の魔の手のために日々に資本家の別荘や、工場の下敷に蹂躙されていく、醤油を造ることも、酒を造ることも、烟草を作ることも、すべて人間としての自由は奪われてしまつた、都会的文明は、不自然なる生産掠奪の征服的社会組織となつた[23]、と書くものがいた。伝統的な農村社会は体質的にも和を尊ぶ共同体であつた、そこにおける住民間の相互信頼、相互扶助という農村社会の基本原理は、近代資本主義制度と、その文明の侵入によつて発生した寄生階級としての地主と隷属を強いられる小作人との階級的分化対立によつて崩壊したという考え方が表出していた。現下のままでは「本当になつかしい美しい時代は来ないのである[24]」と、新人会は書いた。また別の所では「見よ。田園のひろいひろい景色を——何と土地は豊かではないか。川はしづかに流れてゐる。空を行く雲もおだやかである。そこには平等があるのだ。しかも人間の世界にはこの平等がない[25]」とも書く。この田園のごとく人間も平穏で平等であるならば、農村は全く理想郷である、と言いたいのである。昔の農村生活は平穏であり、そこには相互扶助の人間関係があつたが現在はそれらがない、それらを回復させたいと言外に語つているのであつた。新人会は、農村の生活理想を都市の労働者の生活理想としても実現させたいと思考した。この意識から、新人会員は次のような例まで挙げている。労働者の胸底には、共同して仕事をするという考えが純潔に宿つている、虐げられた者の心持をつらぬいている精神は、この「一しよ」という考えである、アフリカの中央の土民は、毎年、麦を刈り入れて、一年分の食糧をよけたあとは全部ビールにしてお祭の時のんで了うということだ、新しい社

会の建設された時、労働者の「一しよにやる」という精神は、おそらくこういう社会を描きだすにちがいない[26]というのである。労働者の世界も、相互扶助のおこなわれる社会であれば、農村生活の理想が実現されるというものであつた。近代資本主義下の労働者は、農村の出身者だという意識がある。伝統的な農村社会は観念上の故郷であつた。「そこは俺達を待ち焦れてゐる祖先の故郷である、そこが俺達を自由な耕人として迎えてくれる歓びの村である[27]」と表現された。ここにおける理想の生活こそは、相互扶助、相互信頼が基調である共同体的生活であつた。新人会は海外の思想家の立場を借りて、相互扶助や連帯観念を理想とする社会を構想したが、それは新人会員の意識の根底に、土着の共同体的社会を追及する思考様式が存在することによつて可能であつた。

(1) 中村勝範・内川正夫「『デモクラシイ』の思想」（『法学研究』第五十二巻第二号　昭和五十四年二月）参照。
(2) 猪木正道・勝田吉太郎「アナーキズム思想とその現代的意義」（猪木・勝田責任編集『世界の名著　第四十二巻　プルードン・バクーニン・クロポトキン』＜中央公論社　昭和四十二年十一月二十日＞　所収　五〇頁）。
(3) 「クロポトキンの言葉」（『同胞』第六号　大正十年三月　二頁）。なおクロポトキンは一九二一年二月八日、モスクワ近郊ドミトロフ村において死去した。
(4) 「クロポトキンの葬儀」（右同　四頁）。
(5) 前掲中村・内川「『デモクラシイ』の思想」参照のこと。
(6)、(7) 前掲「クロポトキンの言葉」。
(8) 「イロハがるたの話」（右同　第四号　大正十年一月　四頁）。
(9) 「自由労働と奴隷労働」（右同　第三号　大正九年十二月　二頁）、および「労働組合の話」（右同　三頁）。
(10) 杉森孝次郎「生存競争説と相互扶助論」（『中央公論』　第三十五年四月号　大正九年四月　一一〇頁）。なお同誌同号は「生存競争説と相互扶助論」を特集している。執筆者とテーマは以下の通りである。三宅雪嶺「優勝劣敗と相互扶助」、杉森孝次郎、右同論文、堺利彦「此問題の社会的意義」、木村久一「生存競争と相互扶助」、石川千代松「生存競争と相互扶助」。
(11) 関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法進編著『雑誌「改造」の四十年』（光和堂　昭和五十二年五月二十五日）五三頁参照。　なお、『改造』は、同年三月に「クロポトキン思想研究」を特集した。執筆者とテーマは次の通りである。昇曙夢「クロポトキンの社会理想説」、片上伸「クロポートキンに就いて」、伊藤野枝「クロポトキンの自叙伝に現われたるロシアの婦人運動」、室伏高信「クロポトキンの国家観について」。また同年五月には「クロポ

キン著作総評」を特集した。大杉栄「クロポトキン総序」、森戸辰男「『一革命家の思出』に就いて」、山川均「パンの略取梗概」（「都合あり一時見合せ」とある。一一六頁）、賀川豊彦「生存競争の哲学より見たる相互扶助」、杉森孝次郎「クロポトキンの哲学倫理」、昇曙夢訳「クロポトキンの欧州戦争論」、北沢新次郎「社会連帯の思想」（「本論は直接クロポトキンの思想を評論したるに非ずと雖も、彼の思想と密接なる関係あるを以て、特に参考として北沢教授の執筆を乞えり（記者）」とある。一五二頁）。

(12) 「闘争か和合か」（『同胞』第三号　大正九年十二月　一頁）。

(13) 前掲杉森「生存競争説と相互扶助論」（一〇九頁）。

(14) 前掲（10）を参照のこと。

(15) 前掲「闘争か和合か」。

(16) 前掲杉森「生存競争説と相互扶助論」（一一〇頁）。

(17) 社会連帯の主唱者はフランスのレオン・ブルジョワ（Léon Victor Augusto Bourgeois <1851-1925>）であった。彼は「此の語の科学的定義を『身体上、智能上若くは道徳上の一定現象間に存する相互依存の関係』（Essai d'une Philosophie de la Solidarité. p2.）であるとしている。（中略）相互依存が果して社会生活に於ける科学的事実であるか否かと云うに、兎に角一半の事実であることだけに疑無い。レオン・ブール（ママ）ジョアは此の事実上の連帯関係を理想上の連帯関係に引直して、一種の政治哲学乃至社会政策たる社会連帯主義（Solidarisme）を高調した」（『社会科学大辞典』<改造社　昭和五年五月十五日>　四九九頁）。

(18) 前掲北沢「社会連帯の思想」（一四九頁）。

(19) 前掲（11）を参照のこと。

(20) 「上富士前町から」（『同胞』第二号　大正九年十一月　八頁）。

(21) 「小作人の立場」（右同　第三号　五頁）。

(22) 「小作人運動の勃興」（右同　第八号　三頁）。

(23) 河合正治「呪われた土民生活」（『異邦人』第二巻第三号　大正十年四月　二頁）。『異邦人』は、新人会金沢支部の機関紙であり、河合正治は同支部の有力会員として『同胞』誌上に「落花狼藉」（第七号）を寄稿している。河合は、新人会の一周年紀念祭（大正八年十一月三十日）前後に新人会本部に滞在したことがあった（林要『おのれ・あの人・この人』<法政大学出版局　昭和四十五年六月五日>　一二二頁参照）。河合以外にも金沢支部の会員は新人会本部に逗留している。例えば、大正九年二―三月にかけては、番匠喜正、沢飯七郎の二名が滞在した（「新人会記事」<『先駆』第三号　大正九年四月　一頁参照>）。

(24)、(25) 前掲「小作人の立場」。なお、前掲河合「呪われた土民生活」には次のようにある。「土民の愚痴は哀れにも、森の中に巣を持つ鴉や雀の生活を憶わしめる、何等の支配をも受けず、自由に中空高く飛び廻り、疲れて塒へ帰って行く、自由な鳥や雀を、鳥や雀が人家の庭に遊ぶときにどんな高い囲いでも平気で飛び越えて歌うことを恐れない、この鳥や雀には凡そ何の階級もない、何の貴賤もない、されど人の子は住む家はなく喰うに食はない、

かくあるとも飽くまで呪われた土民は大声で『餓しい――』ということすら不穏なこととして許されないのである」。

(26) 前掲「イロハがるたの話」。

(27) 前掲河合「呪われた土民生活」。

五　結　語

『同胞』の思想には、アナーキズム、サンジカリズム、ボルシェヴィズム、ギルド社会主義などの当時の社会改造論の立場が混在していた。これらは、資本主義に支配された物質的環境を変革することを主張する点において共通するものであつた。『同胞』発刊に遅れて、大正九年十二月に成立した日本社会主義同盟も、反資本主義者を糾合したものであつたが、五ヵ月後には消滅した。日本社会主義同盟の消滅は思想の不統一にあつたとされているが、不統一という点では新人会は日本社会主義同盟にひけをとらなかつた。新人会が日本社会主義同盟の成立に先立つて成立し、同盟の消滅後も存続した理由の一つに、実現をめざす理想の社会観が、伝統的な日本の農村における共同体の相互扶助的生活を観念上に再生するという点において、土着的であつたことをあげることができる。『同胞が』が石川三四郎の言葉の片言を借り、「デモクラシイとはみんなが土着の生活を送る事だ」[1]といつているのも、意味のあることであつた。共同体の理想生活を回復し実現せんと観念すれば、各々の哲学上の相違を超えて、容易に受容する素地が用意されていたのであつた。新人会は『先駆』から『同胞』へと改題したが、その名称の理由は記していない。同誌面をみれば、労働者、農民など資本主義及資本家によつて虐げられ人びとが新人会員の『同胞』と解釈すれば、誌名改題の理由も了解することができるが、それだけの意味で『同胞』ではなかつたであろう。なぜなら、新人会員自身は未だ虐げられた存在ではなかつたからである。むしろ、理想の共同体社会において、またこれを実現せんとする際において、相互扶助し合うもの、これ「同胞」と意識したのではなかろうか。

(1) 「石川三四郎氏の言葉」（『同胞』第三号　大正九年十二月　六頁）。